

11

1【日】 松本千明バレエスタジオ第6回発表会●PLAT主ホール

3【火・祝】 一般社団法人東三河法人会 社団化40周年記念講演会
ミュージカル落語×ソング&ダンス●PLAT主ホール

7【土】・8【日】 『僕らの時代じゃない』●PLAT主ホール

7【土】・8【日】 高校生と創る演劇『わたしの星』●PLATアートスペース

17【火】・18【水】 豊橋演劇鑑賞会 第317回例会 劇団青年座『夫婦レコード』●PLAT主ホール

20【金】 REICH / PÄRT 90 加藤訓子が紡ぐ、ライヒ／ペルト90●PLATアートスペース

22【日】 RIKA CONCERT 2026 With Love●PLATアートスペース

23【月・祝】 中部ゆうゆうフェスタ2026 ～大人の音楽愛好家のための特別なひととき～●PLATアートスペース

27【金】-29【日】 『スリーゴースト』●PLAT主ホール

12

12【土】・13【日】 劇団M.M.Cオリジナルミュージカル『ALICE』●PLAT主ホール

12【土】・13【日】 マームとジブシー × 公共ホール4館共同制作『under ground』●PLATアートスペース

18【金】-20【日】 シス・カンパニー公演『果てない～甦る母篇～』●PLAT主ホール

23【水】 プラットワンコインコンサート 早川純礼「夢を紡ぐ——ドビュッシーとともに」●PLATアートスペース

2027

15【金】 ピアニスト伊藤修子プロデュース 夢の音楽会 vol.1 中村詩子(ヴィオラ) 伊藤修子(ピアノ)
●PLATアートスペース

16【土】 第14回桜丘高等学校ダンス部自主公演 DO THE RIGHT THING●PLAT主ホール

27【水】・28【木】 豊橋演劇鑑賞会 第318回例会 トム・プロジェクト『鬼灯町鬼灯通り三丁目』●PLAT主ホール

PLAT NEWS



表紙／『スリーゴースト』
企画・発行／公益財団法人豊橋文化振興財団
編集・デザイン／味岡伸太郎＋有限会社STAFF
令和8年10月発行79号[年4回発行]

公益財団法人
豊橋文化振興財団情報誌
2026年11月-2027年1月

vol. 79



TOYOHASHI
ARTS
THEATRE
PLAT

プラットニュース

1

Interview:1

高校生と創る演劇

『わたしの星』

高校生と一緒に時間を過ごすことで書けた。

柴幸男・藤田恭輔

3

Interview:2

『スリーゴースト』

理解するというより

「感じる」ことのほうが強い舞台。

倉科カナ

5

Interview:3

マームとジブシー × 公共ホール

4館共同制作

『under ground』

四つのまちの出身者が

地下鉄の満員電車の一両に

乗り合わせているというイメージを持っている。

藤田貴大

7

Report

舞台手話通訳養成講座

実施レポート

『楽屋ー流れ去るものはやがてなつかしきー』

発表会

振り返りー

答えがひとつではない世界を体験して

9

Information

PLAT 主催・共催公演情報

Ticket center

13

Pura pura

バラコの寄り道ぶらぶら

歌という拳で殴る

桑原裕子

14

Sponsor

Support

『わたしの星』は高校生との「共作」と謳われていますね。柴——高校生に何か言葉を書いてもらったわけではないんですが、2014年の初演ではオーディションや稽古など見ながら戯曲を当て書きしていったんです。自分で一から書き上げたというよりは高校生と一緒に時間を過ごすことで書けた感覚が強いので、自然と共作という表現になったんだと思います。プライベートな情報をそのまま劇にしていまませんが、どこかで彼ら自身が舞台上に立っている感じにしたかった記憶はあります。

オーディションの手応えはいかがでしたか。

藤田——人前で声を出すにも、最初の一步にすごく勇気がいるようなちょっとシャイな方が多かった印象です。実際、演劇経験者や演劇部は半分もいません。だから導入はじっくりやる必要があると思い、稽古に先駆けてワークショップの機会も設けました。ゆっくり言葉を交わしながら信頼関係を築く中、今はすごく良いチームだなと思い始めていて。自己主張だけでなく相手の話もしっかりと聞く姿勢を持っていて、皆さんとても頼もしいです。

メタ構造やアングラなど多彩な演劇様式が入り交じった感じもしますが…。

藤田——僕のせいなんです。柴さんが2017年以降の再演でカットした場面があるんですけど、面白いと思って復活させちゃったんです。

柴——最初は高校生だけでも上演しやすいよう学校の音楽室を舞台にしたワンシチュエーション的一幕物で、会話劇にちょっと音楽的なパフォーマンスがある構成でした。その後、上演を繰り返すうち複雑化していったんです。でも今回の上演台本を読んだら、私のをぎ落とした部分が復活していて。例えばスピカという登場人物がロッカーに隠れて外の話聞く場面のドキドキする面白さを私は失くしてしまったけど、藤田さんは復活させています。高校生の発表会の話なのに暗黒演劇のようなものが始まるギャグみたいな場面も

復活して驚きました(笑)。モノログもあればダイアログもある。ラップも歌うし、踊るし、観客に問いかけるし…、確かにバラエティ豊かです。

上演台本で意識されたことは？

藤田——再演の度に台本が少しずつ変わるのでひと通り読んだんですが、配役・展開が結構違っていて。ジャズのようにテーマとコード進行はあるけど、どういうソロ回しをするかなどはかなり委ねられていると感じました。それもあり、勇気を出して一旦好きにやらせてもらおうと。ひとつ思い切って改訂させていただいた点は、高校時代への回顧的な視点をもった台詞や描写などを、「今・この瞬間」という視点から再構成したこと。高校生の熱量・エネルギーがよりストレートに伝えられたらなという狙いがありまして、ドタバタとしたコミカ

藤田恭輔

[ふじた・きょうすけ]
1996年生まれ、秋田県出身。脚本家、演出家、かるがも団地主宰。2018年に東京都立大学卒業後、演劇サークル「劇団時計」の同期と共に、劇団かるがも団地を旗揚げ。19年・21年佐藤佐吉賞優秀演出賞、22年優秀脚本賞受賞。24年『三ノ輪の三姉妹』は三鷹市芸術文化センターのMITAKA “Next” Selection 25th に選出。

藤田恭輔

上演台本・演出



時間を過ごすことで書けた。

高校生と一緒に



柴幸男
作

ルな劇にできたらと考えています。柴さんは海や爽やかさを大事になさっていた印象ですが、私は太陽のような熱や元気さを大事にして上演台本を書きました。イメージカラーは赤というか。あとは「豊橋感」をどう出すか。元々は海拔が上がってより小さな島国になりつつある未来の日本という設定の戯曲ですが、豊橋の中心部は海から離れているので馴染みが薄いかもしれないとか「穂の国」なので田んぼの要素を入れてみようとか、いろいろ画策しています。

柴——台本、面白かったです。ありがとうございます！野球のくだりなんかは私の台本に全然ない要素でしたね。

藤田——オーディションで「中学校まで野球部でした」という子がいたんです。

柴——そうなんです！藤田さんの台本を読んで豊橋の高校生たちが影響しているんだろうなと想像していたので、上演がより楽しみになりました。藤田——高校生と出会って日は浅いですが、皆さんの人柄が少しずつ見えてきました。台本上の役と素顔が意外と近いのかも？と思う瞬間などもありつつ、一緒にさらに豊かな上演にできたらと思います。今回の公演は暖簾分けのような心境で、創業以来柴さんが継ぎ足されてきたタレの骨子を読み解きつつ、今の時代性や、豊橋の高校生とつくる意義にもしっかり向き合いたいです。

『わたしの星』や高校生と創る演劇という企画、それぞれへの想いをお聞かせください。

柴——『わたしの星』は自分だけのものじゃないというか、毎回その時の高校生の「ある時間」を劇に密封させてもらうというか…、本当に不思議な演劇です。東京、大阪、台湾と様々な地域の高校生と創作してきたのは、大人が高校野球を見て喜ぶのに近いのかなと。若者たちの時間を眺めて楽しんでいるわけです。ただ、高校生と年齢が離れてきてもう上演できないかなとも思っていた折、藤田さんが台本を更新してくださった。自分より若い世代の演劇人が豊橋の高校生と出会い、『わたしの星』を上演する。この試みには新しい喜びがあります。

藤田——小劇場シーンで劇団活動をしていると、つい商業性に意識がいきがちです。でも「高校生と創る演劇」を通じて、上昇志向の縦軸だけでなく横軸＝演劇の裾野を広げることに関わって大きな意義を感じています。例えば、違う学校から集まったたくさんの高校生と共同作業するにはどうコミュニケーションを取ればいいのか、とか。商業性や効率に絡め取られず、人間として大事なことを確認できているのかなと。個人的には、今から公演後の自分の喪失感が心配(苦笑)。それほど有難い機会をいただいたと思っています。

取材・文 小島祐未子

高校生と創る演劇

『わたしの星』

オーディションで選ばれた
高校生がプロと舞台に挑む！

11月7日[土]13:00開演・18:00開演

11月8日[日]13:00開演・17:00開演

作＝柴幸男

上演台本・演出＝藤田恭輔

出演＝オーディションで選ばれた高校生

会場＝PLATアートスペース

Interview:

サイモン・ステューヴンス×ショーン・ホームズによる世界初演の新作舞台！

『スリーゴースト』

11月27日[金]

18:00開演

11月28日[土]

13:00開演・18:00開演

11月29日[日]

13:00開演

作＝

サイモン・ステューヴンス

翻訳＝広田敦郎

演出＝

ショーン・ホームズ

美術・衣裳＝

ジョン・ボウザー

出演＝堺雅人、

倉科カナ、伊勢佳世、

迫田孝也、sara、

小日向星一／

高畑淳子、段田安則

会場＝

PLAT 主ホール



「感じる」ことのほうが強い舞台。理解するということより

出演

取材・文 小島祐未子

倉科カナ

出演が決まった時のお気持ちをお聞かせください。

倉科——私は海外の方の演出で舞台に臨むのが初めてなので、どういった自分が引き出されるのか未知の体験ですごく楽しみでした。台本はまだできあがっていない段階でしたが、キャストを拝見したら百戦錬磨の素晴らしい役者さんばかりで「みなさんとお芝居をしてみたい、どんな化学反応が起きるのか挑んでみたい」というのが最初の想いでした。

ご自身が演じるハナはどんな人物ですか。

倉科——ハナという役柄はすごく難しく、どうしようかと(苦笑)。戯曲自体には近未来的な要素もあり、少し社会派でもあります。その上でハナ、堺雅人さん演じるハナの夫ジョー、伊勢佳世さん演じるハナの姉ミカ、この3人を中心とした人間関係がすごく魅力的な脚本になっているので頑張りたいなと。ハナは静と動で言えば「静」の要素が強いですけど、内に沸々としたマグマみたいなものを秘めていて、それをどう表現しよう

か模索しています。姉のミカは「動」の要素が強く、感受性豊かで、周りの人が見えてないようなところまで感じてしまい、それが突飛な言動にもつながります。対してハナは、見えていないというか、見ないように感じないようにしているというか…。父や義理の母との関係、ジョーやミカのことを考え、感じてはいるけれど、あまり表に出さず抱えていきます。途中いろんな事実がわかったり、ショッキングな出来事もあるんですが、あくまで静かに静かに爆発する。いろんなことを抱え、それでも生きていくのがハナの役割なんです。爆発するならいつをクレイジーに爆発できたほうが楽なんですけど、ハナは「受け入れられない」とちゃんと伝えた上で、それを抱えて生きていくという女性。本当に難易度が高いです。20年の芸歴を試されるような、久々に難しい役をいただいたというような心境です。

堺さんとは初共演ですが、どんなイメージをお持ちですか。

倉科カナ[くらしな・かな]
1987年12月23日生まれ。熊本県出身。2006年にデビュー以降、数々のドラマ、映画、舞台で活躍し、2022年には第29回読売演劇大賞優秀女優賞を受賞。近年の主な出演作に【舞台】『プレゼント・ラフター』(26年)、『My Boy Jack』(23年)、【映画】『正直不動産』(26年)、『【推しの子】-The Final Act-』(24年)、『三日月とネコ』(24年)、【ドラマ】『浮浪雲』(26年 NHK)、『キューティ』(25年 TX)、『MISS KING』(25年 ABEMA)など。

倉科——堺さんってキュートじゃないですか？CMなども「この方がやるとなぜこんなに可愛いんだろう!」と思って見えています。またギャップもあって、作品や演技を拝見すると実直さをすごく感じます。セリフもあまりNGを出さないとお聞きしていますし、実直でキュートなイメージですね。あとは、芝居に遊び心がある方じゃないかと想像していて。堺さんとの夫婦像については、コミュニケーションを取りながら自然に作っていったらいいなと考えています。

キャストには共演の多い高畑淳子さんもいらっやいますね。

倉科——高畑さんとは親子役が多く「芸能界の母」と呼ばせていただいています。舞台をご一緒するの初めてなんです。本当に素晴らしい舞台人なので、いろんな面を盗んで吸収したいですね。もしも高畑さんが大丈夫であれば、ご相談とかできたらいいなと思います。

Interview: 2

劇中、夢をデジタル化して再生できる「リープマインド」という技術が出てきます。AIなどが身近になった今どのようにリアリティを感じますか。

倉科——ここ10年、20年でテクノロジーというものが非常に進んだとは感じています。今やスマホで何でもすぐ検索できて、高画質での撮影や編集も当たり前になっている。そんな時代になった今、皆さんもリープマインドをそれほど非日常のことだと捉えないような気がしています。世界情勢の話題も会話に出てくるのですが、舞台の上で起きている近未来の様子が皆さんには身近なものとして受け入れてもらえるんじゃないかと思いますね。全体としては、観終わって何かを理解するというより「感じる」ことのほうが強い舞台かもしれません。

リープマインドという題材は映像のほうが見せやすい印象も受けますが、生の舞台で扱う意義をどうお考えですか。

倉科——確かに映像にしても美しいとは思いますが、舞台のほうがより説得力があるかもしれません。リープマインドについては堺さんが結構しっかり説明なさるんですけど、生で説明を聞いて納得させられるというか…、今ここで起きてることがいっそう身近に感じられる気がするんです。また振付家の小野寺修二さんがステージングを手がけるので、場面転換が美しく夢のような感じになると思います。映像は視覚的にはクリアに見れても、俯瞰して見てしまう側面がありますよね。一方、舞台には生身でやっているからこそその美しさやエネルギーがあり、逆に非日常を感じさせないというか、一瞬トリップできるんじゃないかと。生の舞台には観客を巻き込んでいく強みがあると思いますね。

作者サイモン・ステューヴンスさんは「愛と結婚が持つ脆さと可能性についての物語」ともコメントしています。

倉科——この物語が最終的に行き着く先ですね。相反するようですが、何かが崩れてしまうけれど、どこかに可能性はあるのかもしれないみたいな…。特にハナとジョーは綱渡りの状況。結末も本当に何とも言えないんですよ。皆さんに「どう感じますか？」と問うようなものになると思います。それはサイモンさんからの大切な問いかもしれません。

最後に豊橋の皆さんにメッセージをお願いします。

豊橋の皆さんは芸術にとっても敏感というか、センスがいいですね。ドキドキしつつ、何う日を楽しみにしています。ツアーに出る頃までには作品がより深まっていたらいいなと思っておりますので、皆さんお越しいただけたらうれしいです。

塩見——『under ground』は、豊橋、富山、鶴岡（山形）、茨木（大阪）の4つのまちで滞在制作や現地リサーチをされて作られるということで、どんなふうになるのか教えてください。

藤田——もともとは4つのまちを無理やりつなぐつもりはなかったのですが、各地のリサーチの際に、例えば鶴岡でお話を聞いた方が「愛知の大学に通っていたんです」とか、「この町には富山の薬売りが来ていたんです」と話していて、関係のないはずの土地なのに、少しずつ点が線になっていく感覚があったんです。そう考えていくうちに、登場人物の背景ができて始めているところ。豊橋にもアーケードはありますが、他のまちにもアーケードがあって、それぞれの雰囲気があった。水上ビルのようないわゆる「暗渠」も、そのまちで歩いていてもキーワードになりましたね。

塩見——タイトルの『under ground』や、地下について聞かせていただけますか。

藤田——この作品を着想したころは、地下の見えなさ／仄暗さをタイトルで表現しようと思っていたんです。同時に、地下鉄サリン事件のこともイメージにあって、東京の地下鉄に乗っている時、この満員電車にもしかしたらほとんどの都道府県の出身者がいるんじゃないかと想像する 때가あって、『under ground』では、まずは登場人物全員が同じ一両の箱に乗り合わせている、という設定にしようとおもっています。

リサーチしていくなかで、その土地の“地下”について、各館の皆さんに伺いました。鶴岡では、即身仏について。地下に入った僧侶が、ミイラ化する数年間を経てから掘り起こされる。茨木には、ダムになった地区があった。富山の劇場のあたりは、かつて澱んだ沼だった。各劇場のスタッフさんたちは、始め「地下なんてあるかなあ」って感じだったんだけど、地下という視点を持って調べていくと、意外ととんとん地下にまつわるエピソードが見つかっていきました。豊橋はやっぱり、暗渠。あとは、地下通路についても気になっています。

ひとつのまちを描くとなると、とにかく闇雲にその場所について調べて、いろんなエピソードを作品に取り込んでいくとするわけですが、今回は4つの土地を等価値に見ていくというベースがあるので、それぞれどうコネクトしていけるのか、と考えていく。だから、モチーフはとんとんシャープに絞れていく感じがあって、それは初めての感覚で、面白いですね。

ただ、でも、“本当のことを描く”という観点からは矛盾しているようだけれど、回り回って、しっかりとフィクションを描いてもいいよね、とも思っています。ファンタジーくらい、振り切れた。リサーチして描くけれど、ドキュメンタリーみたい

にはなりたくない。最近のマームとジブシーでも、夢と現実のあわいを描くというのが、ひとつのテーマにはなっているけれど、今回はもっと違うアプローチで、ドリーミーな世界を目指したい。

登場人物をそれぞれが、今回リサーチした各地の出身者で、ストーリーとしてはリサーチしたまちの順に、豊橋、富山、鶴岡、茨木と場面が進行していく予定です。出身地の異なる俳優たちが、つながっていたり、つながっていなかったり、という。

塩見——藤田さんがリサーチに惹かれる理由とは。

藤田——ここ数年は、現実ってレベルがとてつもないことになっている気がしていて、現実が作品の内容に大

四つのまちの出身者が地下鉄の満員電車の一両に乗り合わせているというイメージを持っている。

作・演出
藤田貴大

聞き手 塩見直子 穂の国とよはし芸術劇場PLAT「事業制作部チーフ

きく影響するとおもっているの、とにかく癖のように、どこへ行ってもリサーチしています。惹かれるというよりも、どこにいても、何を食べていても、未来の作品のことを想像していますね。なんで、どうして、とすべて理由が知りたくなって、気を抜けない。

戯曲に書く言葉とは別に、たまにただわけもなく描きたくなる風景に出会うことがあります。それは、執筆というよりも演出に影響しますね。あと、どこかでフィールドワークするときに心がけているのは、へんに期待しないということですね。あまり先入観を持たずに、その土地や、そこに住むひとと出会おうとおもって、そこへ行きます。例えば、豊橋のワークショップでは参加者から「天気予報で“風力”を見る」という話に驚きました。風力を見るだなんて、僕は考えたこともなかったので、ここに来なければ出会えない言葉だった。

塩見——リサーチの中で「劇場が建つ前に何があったのか」という質問がありましたが、なぜそれに興味を持たれたのでしょうか。

藤田——観客も役者も、その劇場が以前どういう場所だったのかを知らずに、そこに集まっていますよね。僕も、もちろん知らない。この劇場が建っているこの土地は、かつて沼だったとか。豊橋だったら、このあたりにもうひとつ駅があったとか。そういうことが語られて、知るとき、僕はフィクションを通り越して、ぎょっとするんですよ。それを知らずに、無自覚に、ここに来てたんだ、と。土地や記憶を掘り起こす作業をするうえで、まずここがなんだったのか、というようなことを各場面で語りたい。

リサーチをする時に、昔あった映画館や、さらには遊郭街とか、その土地の文化について意識を向けると、まちのことがわかっていく。その土地になにがあって、なにがないのか。調べてみると、豊橋はすごく色々なものがあつたのだと思います。やはり、それはかつて豊橋に軍の駐屯地があつたからかもしれないですね。

塩見——今回の公演では俳優以外にもアンサンブルキャストとして、その土地ごとの方に出演していただきます。

マームとジブシー×公共ホール4館共同制作『under ground』

豊橋・富山・鶴岡・茨木でのリサーチやインタビューを出発点に、人々や土地が持つ記憶を描く。

12月12日[土]14:30開演

12月13日[日]14:30開演

作・演出＝藤田貴大

会場＝PLAT アートスペース

Interview: 3

藤田——最近、僕のなかにまち自体を描きたい気持ちがあつて、それを突き詰めていくとメインキャストの4人とか5人の登場人物では少ない気もするんです。本当は、30人、40人が舞台のうえにいて、まちや風景を形成してほしいくらいです。今回の、アンサンブルキャストのみなさんは「オーディションをします」と募集して集まった人たちではなく、偶然ワークショップに来てくれた人たちです。土地によって、人数もバラバラですね。

藤田——もちろん、オーディションというふるいにかけてたわけではありません。できあがつた演目をツアーするだけなら、僕の近くにいるキャストだけでいい。でも、そのまち、そして土地のことを考えると、その土地で生まれ、今も住んでいる人たちの身体に匹敵するものはないので、舞台上がってほしいとおもいました。

塩見——改めて豊橋の皆さんに、メッセージをいただけないでしょうか。

藤田——豊橋は、これまでも本当にたくさんお客さんが観に来てくださって、自分にとっては特別な場所になっています。豊橋で初演を迎える作品というのは初めてで、東京ではなく、豊橋でプレミアだった場合、という反応になるんだろう。豊橋で作ってみたい。これは結構、熱い、激熱ですね。豊橋の観客のみなさんもすごく熱いから、楽しみです。

塩見——各劇場と、藤田さんとマームとジブシーが一緒になって作れるというのは貴重です。お客様にとっても貴重なものになると思います。ありがとうございます。豊橋でお待ちしています。

藤田貴大

[ふじた・たかひろ]
劇作家/マームとジブシー主宰。1985年生まれ、北海道伊達市出身。2007年に劇団「マームとジブシー」を旗揚げし、以降すべての作品で作・演出を担当。作品を象徴するシーンを幾度も繰り返す“リフレイン”の手法で注目を集め、2012年、26歳で第56回岸田國士戯曲賞を受賞。多様な分野の作家やアーティストとの共作や演劇経験を問わず幅広い年代との創作に積極的に取り組む。2013年には初の海外公演を実現し、その後もレパートリー作品の上演やワークショップ、国際共同制作を通じて国外での活動を継続。2023年からは美術作品にも力を入れる。そのほか、エッセイ、小説、共作漫画の執筆など、活動の幅を広げている。

撮影：橋本倫史 6

7月4日[土]・5日[日]・11日[土]・12日[日]

舞台手話通訳 養成講座 実施レポート

受講者＝6名

講師＝河合メアリ(ろう俳優・サインアーティスト)、
樋口ミュ(劇作家・演出家)

コーディネーター＝加藤真紀子

手話通訳＝小原郁子、高田美香、水野里香

俳優＝近藤樺楊、五十嵐遥佳、山田梨央

会場＝PLAT 創造活動室A

去る7月、プラット初の「舞台手話通訳養成講座」が開かれました。舞台手話通訳とは出演者と同様に舞台上に立ち、演劇などをリアルタイムで手話通訳する役割。これまでプラットでは3作品の舞台手話通訳付き公演を実施しており、その普及を促すためにも人材育成に取り組むこととなりました。今回は手話通訳の経験者を対象に全国から応募があり、選考をおこなった結果、愛知県内から2名、県外から4名が受講。このような講座は全国的にも少なく、需要の高さがうかがえました。1年未満から15年以上と幅広いキャリアの受講者たちは4日間・28時間の濃密な時間を完走。ここでは最終日におこなわれた発表会を中心に講座の様子をレポートします。

取材・文 小島祐未子

『楽屋－流れ去るものはやがて なつかしき－』発表会

7月12日、ろうの関係者を迎えて成果発表会がおこなわれました。上演したのは清水邦夫の戯曲『楽屋』の1場面、演出は講師の樋口ミュ、手話監修は講師の河合メアリ。幽霊となって劇場に住みつく女優ふたりと若手女優の会話シーンです。受講者は3人ずつA・Bチームに分かれて舞台手話通訳を実践。10分弱の短いシーンながら、おかしさも怖さもはらんだ物語だけに見応え十分の舞台が繰り上げられました。

上演後は観客から感想を聞く時間も設けられました。その際、手話通訳に目がいくため俳優をじっくり見られないという問題が指摘されます。ただ、樋口の演出では手話通訳が固定の位置につかず俳優さながらに演技もするので「こういうやり方もあるのか」「手話通訳が後ろを向くと俳優を見る余裕ができて助かる」といった感想もありました。ろう者が手話を見る時は高い集中力が必要で、聴者には計り知れない緊張が伴うことに気づかされます。

また「誰がしゃべっているのかわからないとストレスに感じる」という意見もあり、稽古中に度々指摘のあった「ロールシフト」の難しさが思い起こされました。ロールシフトとは「ロール＝役」の「シフト＝切り替え」を意味し、ひとりの手話通訳が会議などで複数の話者に対応する場合、この技術が求められます。落語のように顔の向きを変えるわけではなく、独特の切り替え方があるので、受講者たちも改めて苦戦していました。

さらに難題に思えたのは、ろう者の「本音が知りたい」という意見です。舞台手話通訳にはセリフや音の

情報を伝える使命がある一方、舞台作品には見方や解釈を観客にゆだねる側面があります。セリフになっていない言外の部分を多様に受け止められるのは演劇の醍醐味。これについては演劇そのものの課題ではないかと感じました。「すべてわかることが良いわけではない」という演劇論・芸術論は、舞台芸術体験が乏しい人からすると「わかりにくい、難しい」といった苦手意識につながりやすく、聴者でも敬遠する原因になっていると思うからです。しかし、この繊細な問いに樋口は「感じたことを重視し、わからないことを考える。観客一人ひとりの真実を大事にするのが演劇という文化」と真摯に語りました。

見巧者という言葉がありますが、鑑賞を重ねて舞台芸術の勘どころをつかみ、いわゆる目の肥えた観客になっていくのは、ろう者も聴者も同じはず。そう考えると、ろう者が舞台芸術に慣れ親しめる環境づくりとして、舞台手話通訳付き公演をより普及させることを課題解消への一歩になるのではないかと思います。

振り返り——答えがひとつではない世界を体験して

樋口の創作現場では終演後に「振り返り」と呼ばれるミーティングが開かれます。これは仮に千秋楽であっても同様。その作品のためだけではなく、今後も続くおのおのの活動のために意見交換をおこなうのです。

受講者の半数以上は演劇経験がなく、みな一様に普段の手話通訳とは違った作業に困惑したことを吐露。「引き出しが足りない」「自分の言葉に落とし込め

ていない」といった感想が交わされる中、「癖を発見するなど自分の身体に気づかされた」という声も聞かれました。樋口や今回のコーディネーターで手話通訳の先輩である加藤真紀子からも指摘があったとおり「舞台に立つための身体」がまず必要であることを全員が痛感した様子。半面、4日間やりきった充実感や安堵の表情も見られ、彼女たちには苦労や奮闘ひっくるめてすべてが刺激となったようです。

芸術は答えのない世界と言われたりするものの、創作する側は自分なりの選択には迫られます。樋口が初日から「主体性・自主性」を唱えていたのはそのため、受講者はセリフの意味や俳優の感情、場の持つニュアンスなどを自分なりに読み解き、おのおのが選択した手話表現で通訳しなければいけませんでした。また講師の河合が、今回の経験は舞台だけに活かされるものではなく、日頃の手話通訳時にも役立つ姿勢であることを強く説いていたのも印象に残ります。手話通訳はただ単に言葉や文章を手話に変換するのではなく、ろう者にとって過不足なく適正に情報を伝達することが重要。河合は日常的に周囲をよく「見る」ことで状況の把握に努め、場数や経験を重ねて引き出しを増やし、その上で豊かな手話表現を磨いていく大切さを伝えていました。

ろう者と聴者の文化背景の違いや、その間に立つ者としての心得にも会話は及び、手話通訳の道は長く果てしないことがうかがえました。だからこそ主体性・自主性が大事だと、河合。受講者たちには様々な批評を受けたとしてもウニのように、ガンダムのように、頑丈な鎧をまとって強くなり、自らの考えや表現を築いていってほしいとユーモアも交えてエールを送りました。

Report

立川志の輔
独演会 2026

10/26 [月] 13:30 開演

古典、新作問わず落語に新しい息吹を吹き込む、
大人気の立川志の輔独演会です。
会場＝PLAT 主ホール
出演＝立川志の輔

予定枚数終了



『スリーゴースト』

11/27 [金] 18:00 開演
11/28 [土] 13:00 開演・18:00 開演
11/29 [日] 13:00 開演

世界で活躍を続ける劇作家サイモン・スティーヴンスが、
数年後の世界をテーマに新作戯曲を書き下ろし。6年に
わたる準備を経てついに世界初演。名実ともに日本を代
表する俳優・堺雅人を主演に迎えた実力派俳優陣も見逃
せません。
会場＝PLAT 主ホール
作＝サイモン・スティーヴンス
翻訳＝広田敦郎
演出＝シヨーン・ホームズ

11月28日
13:00

SELECT
4

マイセレクト4 対象公演

託児サービス対象公演

要予約。生後6ヶ月以上。
お一人様500円。お申込み、お問合せはプラットチ
ケットセンター・劇場ホームページまで

高校生と創る演劇
『わたしの星』

11/7 [土] 13:00 開演・18:00 開演
11/8 [日] 13:00 開演・17:00 開演

柴幸男の代表作をオーディションで選ばれた東三河の
高校生とともに新たに上演。
会場＝PLAT アートスペース
作＝柴幸男
上演台本・演出＝藤田恭輔
出演＝オーディションで選ばれた高校生
料金＝[全席自由・日時指定・整理番号付]一般3,000
円、高校生以下1,000円 ほか

11月8日
13:00

11月7日
13:00

11月7日
13:00

ポータブル字幕機貸出対象公演

聴覚に障がいのあるお客様のためのポータブル字
幕機の貸出あり【要事前予約】

舞台説明会対象公演

視覚に障がいのあるお客様のための舞台説明会
あり【要事前予約】

マームとジブシー ×
公共ホール4館共同制作

『under ground』

12/12 [土] 14:30 開演
12/13 [日] 14:30 開演

マームとジブシーと全国の公共ホール4館が共同し新作
演劇を創り上げます。リサーチと豊橋での2週間の滞在
制作を経て、日本初演でお贈りします。
会員先行＝10月10日(土)
一般発売＝10月24日(土)
会場＝PLAT アートスペース
作・演出＝藤田貴大
出演＝伊野香織、内田健司、成田亜佑美、長谷川七虹
ほか
料金＝[全席指定]4,500円 ほか

SELECT
4

ライブポートとよはし

コバケンとその仲間たち
オーケストラ 特別演奏会

2/20 [土] 15:00 開演

プロ、アマチュア、障がいの有無を問わず、全ての人が
輝いて活きる社会作りを目指すこのオーケストラには、障
がいのあるメンバーも在籍しています。「支え合い、共に
生きる」ことで生まれる大きなエネルギーを、演奏を通して
皆様にお届けします。
会員先行＝10月10日(土)
一般発売＝10月24日(土)
会場＝ライブポートとよはしコンサートホール
指揮＝小林研一郎
出演＝瀬崎明日香[コンサートミストレス/ヴァイオリン]、
朝岡 聡[フリーアナウンサー&コンサートソムリエ]、
コバケンとその仲間たちオーケストラ[管弦楽]
曲名＝『アイダ』より「凱旋行進曲」、ツィゴイネルワイゼ
ン、ボレロ ほか
料金＝[全席指定]S席6,000円、A席3,500円 ほか
※発売日初日は、お一人様4枚までの枚数制限あり



One coin
concert

ワンコインコンサート

Pick up

若手音楽家育成事業
プラットワンコインコンサート

「若い音楽家には活躍の場を、お客様にはより音楽を楽しめる機会を」と企画されたPLATオリジナルのコンサートです。
500円でぜいたくなひとときをお過ごしください。
会場＝PLAT アートスペース 料金＝[全席自由・整理番号付]500円 上演時間＝60分

早川純礼

好評発売中

「夢を紡ぐ
——ドビュッシーとともに」

12/23 [水] 11:30 開演

出演＝早川純礼[ピアノ]
演奏予定曲目＝ドビュッシー:ベルガマスク組曲、喜び
の島 ほか



ルヴェール
Luveil「舞う音、交歓のとき」

2/11 [木・祝] 14:00 開演

発売日＝12月22日(火)
出演＝小金丸阜月[ヴァイオリン]、渡邊更紗[ヴィオラ]
演奏予定曲目＝ショスタコヴィチ:5つの小品、サラサーテ:ナヴァラ Op.33 ほか



クラレテ
Clarté「花と踊りの調べ」

3/11 [木] 11:30 開演



発売日＝12月22日(火)
出演＝小柳津綺彩[フルート]、森川遥風[フルート]、小柳さら[ピアノ]
演奏予定曲目＝チャイコフスキー:「眠れる森の美女」よりワルツ、ドブラー:アンダンテとロンド ほか



二兎社
『見よ、飛行機の高く飛べるを』

2/23〔火・祝〕13:00開演

1997年に永井愛が劇団青年座に書き下ろし、これまで数多く上演されてきた人気作を永井愛自身が初演出します。

会員先行＝12月5日(土)
一般発売＝12月19日(土)

会場＝PLAT主ホール

作・演出＝永井愛

出演＝藤野涼子、夏子、鈴木勝大、枝元萌、吉田悟郎、

福本伸一、南谷朝子、原口健太郎 ほか

料金＝〔全席指定〕S席7,000円、A席5,000円 ほか

SELECT
4



貞松・浜田バレエ団

カムヨット

共催

『Kamuyot』

3/6〔土〕15:00開演

巨匠オハッド・ナハリンの作品をレパトリーにする貞松・浜田バレエ団がPLAT初登場。四方を囲む特設ステージでバワフルな動きや熱気を間近で感じられる子どもも楽しめるコンテンポラリーダンス。

会員・一般同時発売＝11月20日(金)

会場＝PLAT主ホール舞台上特設舞台
演出・振付＝オハッド・ナハリン

料金＝〔全席自由〕一般5,000円 ほか



—撮影：古都栄二(テス大阪)—

MONO

『新作公演』

3/20〔土〕14:30開演

3/21〔日〕14:30開演

SELECT
4



3月20日

会員先行＝2027年1月16日(土)

一般発売＝2027年1月30日(土)

会場＝PLATアートスペース

作・演出＝土田英生

出演＝金替康博、水沼健、渡辺啓太、土田英生 ほか

料金＝〔全席指定〕一般4,500円 ほか

Dance residence

ダンス・レジデンス

豊橋アーティスト・イン・レジデンス ダンス・レジデンス2026

にくぶかしぎ

滞在期間＝11/30〔月〕～12/7〔月〕

内容＝ボディオブジェクトの新たな可能性や身体の拡張を探るための市民との交流、および新作に向けたリサーチ・クリエイションを行います。

メンバー＝ON、杉本音音



にくぶかしぎ

ワークショップ 「ボディ オブジェクトで 街の見方を変えよう!ワークショップ」

12/5〔土〕13:00～15:00

会場＝PLAT創造活動室A

講師＝にくぶかしぎ(ON・杉本音音)

対象＝中学生以上

定員＝10名(先着)

参加費＝一般1,000円、高校生以下500円

ワークショップ 「ボディ オブジェクトで 変身ワークショップ」

12/6〔日〕10:30～12:00

会場＝PLAT創造活動室A

講師＝にくぶかしぎ(ON・杉本音音)

対象＝中学生以上

定員＝10名(先着)

参加費＝一般1,000円、高校生以下500円

成果発表会

12/6〔日〕12:15～13:00

会場＝PLAT創造活動室A

出演＝ON、杉本音音

対象＝どなたでも

定員＝30人(先着)

参加費＝無料

申込＝

①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み

②プラットチケットセンター窓口・電話(0532-39-3090)

Work shop

ワークショップ・レクチャー

豊橋市民文化会館 柴幸男 演劇ワークショップ

10/24〔土〕13:30～15:00

『わたしの星』の作者で劇作家・演出家の柴幸男による演劇ワークショップです。

会場＝豊橋市民文化会館リハーサル室

講師＝柴幸男

対象＝中学生～20歳(演劇経験不問)

定員＝20名(先着順)

参加費＝500円

申込＝10月17日〔土〕17:00までに

①劇場ホームページの専用申込フォーム

②参加申込書を窓口・FAX(0532-55-8192)にて提出



柴幸男

旅する舞台映像シリーズ ～つくり手と観客を結ぶ上映会&トーク～ 贅沢貧乏

『わかれうとはおもっているけど』 上映会&山田由梨トーク

11/23〔月・祝〕14:00～16:30

贅沢貧乏による『わかれうとはおもっているけど』について、作・演出を務めた山田由梨さんをゲストにお迎えしての上映会&トークを開催します。

会場＝PLAT創造活動室A

ゲスト＝山田由梨

対象＝どなたでも(未就学児入場不可)

定員＝40名(先着順)

参加費＝一般1,000円、25歳以下500円

申込＝

①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み

②プラットチケットセンター窓口・電話(0532-39-3090)



Photo: Kengo Kawatsura

ワークショップファシリテーター 養成講座2026〔後期〕 「まちと創る演劇」

～多文化な演劇をつくってみる篇(仮)～

12/5〔土〕～2027/1/17〔日〕〔全8回〕

豊橋の人や場所を取材し、そこで出会ったことに焦点を当て、参加者全員で演劇をつくり発表する連続ワークショップです。今年度は、豊橋に暮らす外国にルーツを持つ方々や彼らを取り巻く環境に焦点を当てます。

会場＝PLAT

進行役＝すずきこた、柏木陽

監修＝吉野さつき

対象＝18歳以上で、講座日程に極力参加できる方。演劇経験不問

定員＝20名(応募者多数の場合は選考)

参加費＝3,000円〔全8回〕

申込＝11月22日〔日〕17:00までに

①劇場ホームページの専用申込フォームより申込み

②参加申込書を窓口・FAX(0532-55-8192)にて提出



戯曲を「読む力」#2ワークショップ 「痕跡」を読む ～KAKUTA+

市民とのリーディングに向けて～

2/27〔土〕13:00～18:00または

2/28〔日〕13:00～18:00のいずれか1日

会場＝創造活動室A

講師＝桑原裕子

対象＝高校生以上(演劇経験不問)

定員＝各日15名(応募者多数の場合は選考)

参加費＝一般1,000円 高校生以下500円

申込＝2027年1月31日〔日〕17:00までに

①劇場ホームページの専用申込フォーム

②参加申込書を窓口・FAX(0532-55-8192)にて提出



桑原裕子

撮影：伊藤華織

Ticket center

チケットセンター

チケットの購入・お問合せ プラットチケットセンター

●オンライン

https://toyohashi-at.jp〔24時間受付・要事前登録〕

●電話・窓口

0532-39-3090〔休館日を除く10:00～19:00〕

発売初日はオンライン・電話のみ取り扱い。
翌日以降、残席がある場合は窓口販売あり。

U25・高校生以下割引ご案内

ほぼすべての財団主催公演に、若い人にお得な料金を設定しています。

●料金＝U25〔25歳以下〕:公演ごとに指定する席種の半額／高校生以下:1,000円

●購入方法＝各公演の一般発売初日から取扱い。

●その他＝本人のみ1公演につき1人1枚。枚数限定。座席の指定はできません。要・入場時本人確認書類提示。※一部例外あり。詳細は各公演チラシ・HPにて。



プラットフレンズ募集 入会金・年会費無料

●特典

1 公演情報をメールでご案内します。

2 インターネットチケット予約ができます。

3 主催公演のチケットを一般発売に先がけてご予約できます。
※劇場窓口またはホームページからご登録いただけます。

年末年始休館のお知らせ

穂の国とよはし芸術劇場は、下記の期間休館いたします。

2026年12月29日(火)～2027年1月2日(土)

なお、上記の期間中プラットチケットセンターは電話および窓口とも休業いたします。

チケットのご予約は、インターネットをご利用ください。24時間対応いたしております。休館中のチケットのお引き取りについては、ご予約の際にご確認ください。



生まれる前から結ばれていた そんな気が
する紅の糸

昭和生まれの人間なら、この一行を視線
でなぞるだけで誰でもあのメロディと鼻にか
かった独特の歌声が脳内を駆け巡るので
はないか。

「命くれない」は、当時子どもの私ですら
強烈に記憶している瀬川瑛子の国民的ヒッ
ト演歌だ。とはいえ子どもの私にはサビでく
り返される「命くれない」というフレーズの真
意が掴めず、「命くれるのかくれないのか、
どっちなんだい!」とつっこんでいたし、「紅」
を「くれない」と読むことも知らなかったゆえ、
歌謡番組で瀬川瑛子のバックに当たる真っ
赤な照明が怖かった。控えめながらもやる
せない表情も、女の情念を醸すようでどこか
恐ろしかった。しかしこの曲の真髓は女で
ころではなく、男と女、どちらの主観になっ
ても成立する夫婦(めおと)の歌なのだと思っ
ていたのは『俺節』という作品に出逢ってから
だろう。

『俺節』は1990年代にビッグコミック・ス
ピリッツで連載されていた故・土田世紀氏に
よる漫画で、青森から出てきた青年・海鹿耕
治が上京してプロの演歌歌手を目指す物
語。普段は人前で歌うのが「めぐせえ(恥ず
かしい)」という引っ込み思案で大人しい田
舎の青年が、「オラんだって武器あるったも
の……」というその「武器」とは、彼の歌声で
あり、演歌。自分の魂が震えてどうしようもな
い時、言葉にできない想いがあふれてしま
うその瞬間に、まるで叫びのように彼の口か
ら演歌が放たれる。先述の『命くれない』を

はじめ、石川さゆり『津軽海峡冬景色』、吉
幾三の『北へ』、小林旭の『港』……津軽出
身の耕治だけに「海モノ」は特に多いわけ
だが、漫画では力強く多くの線で描き込ま
れた耕治の絵と共に、歌う曲の歌詞が太い
明朝体で記される。私は学生時代にリアル
タイムで読んでいたが、その荒々しさと泥臭
さ、不器用なまでのほとばしる熱情が、黒々
とした書体ごと飛び込んできた。30年前の
連載当時ですら演歌はもう古いとされ、巷
ではポップソングが溢れているその時代に、
演歌の強い歌詞はまさしく武器のように殴り
かかってきて圧倒されたのだった。

思えば漫画以外のジャンルでこの物語
を何より効果的に見せられるのは舞台に違
いない。なにせ舞台には愛を語る代わりに
歌い、誰かを殴る代わりに歌う、ミュージカ
ルというジャンルがある。そうして9年前に
この漫画は舞台化され、たまさか原作の一
ファンである私も出演するという僥倖にあず
かって、文字通り「歌で殴る」体験を目の当
たりにした。

舞台『俺節』の作演出を務める福原充則
さんは小劇場出身、唐十郎を愛し、現代の
アングラ集団ゴキブリコンビナートに演者と
して多く出演してきた人だけに、人間の不
器用さ、血へと吐くほどのコンプレックス、底
辺に生きる人々を地べたの目線で描ける。
これほどびったりな人はいないと思ったの
だけど、舞台化にあたってなにより楽しみで
あり、同時に未知数でもあったのは、現代の
若い客層に果たして演歌は刺さるのか?と
いうことだった。しかし初演では安田章大さ

ん、そして今年再演されたバージョンでは
松田元太さんという、今をときめく(という言
い方が古いけど)アイドルが演じたことで、
作品の泥臭さと俳優の放つ煌めきとが絶妙
に混じり合い、瑞々しく染み渡る感動を呼
び起こしたと……出演者という手前みそな
がら、そう思う。

それにしても演歌の、あの「熱」とは何なの
だろうか。「命」とか「好きだ死ぬほどに」と
か「燃える火をくぐり」とか、とにかく熱い。想
いが重い。

演歌には“こぶし”という独特の唱法があ
って、「天城越ええええええ〜」と、殴っ
たあとさらにこれでもかとその拳をぐりぐり押
し込んでくる。人生とは、愛とは、人間とは、
それほど熱いし、重いし、痛いのだ。しかし
その“こぶし”こそが今、現代をコスパよくサ
ラファインに生きようとする私たちに必要な
モノではないかと思ってしまった。

今、ふたつのミュージカル作品に携わっ
ているのだが、両作品ともデモ音源が譜面
から歌声生成AIで作成されている。ボカロ
どころじゃない、うまいひとだなあと思ってた
らAIと知って驚いたほど精度が高い。AIは
息継ぎも音ブレもせず、どんな難曲も歌って
みせる。“こぶし”だって技術的にはできる
はず。

けれど、AIには人の生み出す熱だけは
再現できない。熱には痛みがあるということ
がわからないからだ。歌を絞り出す喉の痛
み、大きく呼吸する肺の痛み、そして心の痛
み。それを感じられるのは、いつだって生身
の存在だけなのだ。

Sponsor 広告募集

知識製造業
三遠機材株式会社
http://www.san-en.co.jp

YOSHINO
ASSOCIATES
artistic
engineers
吉野設計研究所
http://www.440a.co.jp

有限会社 魚伊
電話 52-5256

ケンチク 701
KURONO ARCHITECT STUDIO
y.qlo0170@gmail.com

看板広告 アラキスタジオ
豊橋市上伝馬町16 電話52-5586番

本と文具なら
精文館書店
TEL.54-2345

なければつくる
ONOCOM 株式会社オノコム

外科・内科・胃腸科・麻酔科・肛門科
医療法人栄真会 伊藤医院
豊橋市小池町字原下35 電話45-5283(代)

創業文政年間
豊橋市新本町40 電話52-5473番

調理と製菓のおいしい資格。
豊橋調理製菓専門学校
豊橋市八町通一丁目22-2 TEL53-2809

60th
anniversary

豊橋銀行協会 (順不同)
三菱UFJ銀行 静岡銀行 三井住友銀行
三井住友信託銀行 清水銀行 十六銀行
あいち銀行 名古屋銀行 三十三銀行 大垣共立銀行

創業江戸 御菓子専門店
御菓子司 若松園

気まぐれコンサート
事務局／0532-62-9259(小川)

安心・安全な地下駐車場
パーク500
プラット主ホール・アトスペース公演等へのお客様は
30分150円を30分100円(上限4時間まで)に割引します。

整形外科・リハビリテーション科・リウマチ科
医療法人 塩之谷整形外科
理事長兼院長 塩之谷 香 副院長 栗田和洋
豊橋市植田町関取54 電話0532-25-2115(代)

豊橋名産 命あくわ

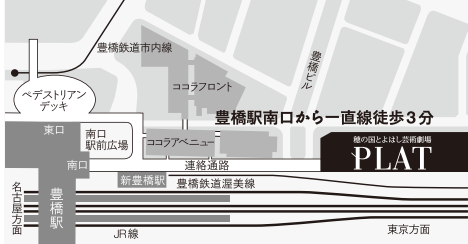
井上皮フ科クリニック
診療時間 月・火・木・金 10:00～13:00 16:00～19:00
土 10:00～14:00 休診日＝水・日・祝
電話0532-55-7007 愛知県豊橋市向山町字中畑13-1マイルストーン1F

プラス・ワンの付加価値をお客様に提供いたします。
共和印刷株式会社
豊橋市小池町36番地の1 TEL46-3281 FAX46-3285

伝統的工芸品豊橋筆
書道用品専門店 高誠堂
豊橋市呉服町四拾四番地 電話52-5514

ISO9001 ISO14001 愛知ブランド企業 認証・認定取得
株式会社 三光製作所
三光精密工業株式会社
豊橋市佐藤一丁目12番地の3

sala
サーラグループ



Support 特別賛助会員のご紹介

私たちは穂の国とよはし芸術劇場の活動を支援しています。

株式会社アイセロ
旭精機株式会社
株式会社イクモ
税理士法人イグラ会計
イノチオホールディングス株式会社
株式会社エクスラージ

大和田和恵
株式会社オリエント楽器
医療法人佳道会 藤城歯科医院
蒲郡信用金庫
川西塗装株式会社
河原崎 妙

株式会社三光製作所
三光精密工業株式会社
サーラエナジー株式会社
株式会社サーラコーポレーション
三遠機材株式会社
株式会社東雲座カンパニー
株式会社シュガーサウンド
大三紙業株式会社
戸田淳子
トヨタネ株式会社
トヨネン株式会社

株式会社豊橋印刷社
豊橋芸術文化事業サポート株式会社
豊橋ケーブルネットワーク株式会社
豊橋信用金庫
豊橋倉庫株式会社
豊橋鉄道株式会社
早川直宏

株式会社平松食品
藤城建設株式会社
学校法人藤ノ花学園
株式会社豊川堂
まちなかビブリオ倶楽部
松井商事株式会社
村田小児歯科センター
物語コーポレーション
山脇康宏
有楽製菓株式会社 豊橋夢工場
ゆーもあねっと
若松園
匿名会員4名
(五十音順)

〒440-0887 愛知県豊橋市西小田原町123番地
電話＝0532-39-8810[代表](9:00～20:00)
開館＝9:00～22:00 休館日＝第三月曜・年末・年始。
第三月曜が祝日の場合はその翌平日。
豊橋駅(JR東海道新幹線、東海道本線、名古屋鉄道)、
新豊橋駅(豊橋鉄道渥美線)直結。豊橋駅南口から徒歩3分。
※駐車場はありません。公共交通機関をご利用いただくか、
お近くの公共駐車場等をご利用ください。

穂の国とよはし芸術劇場 PLAT